

越境精神

小長谷 有紀

梅棹忠夫の残したもの

3

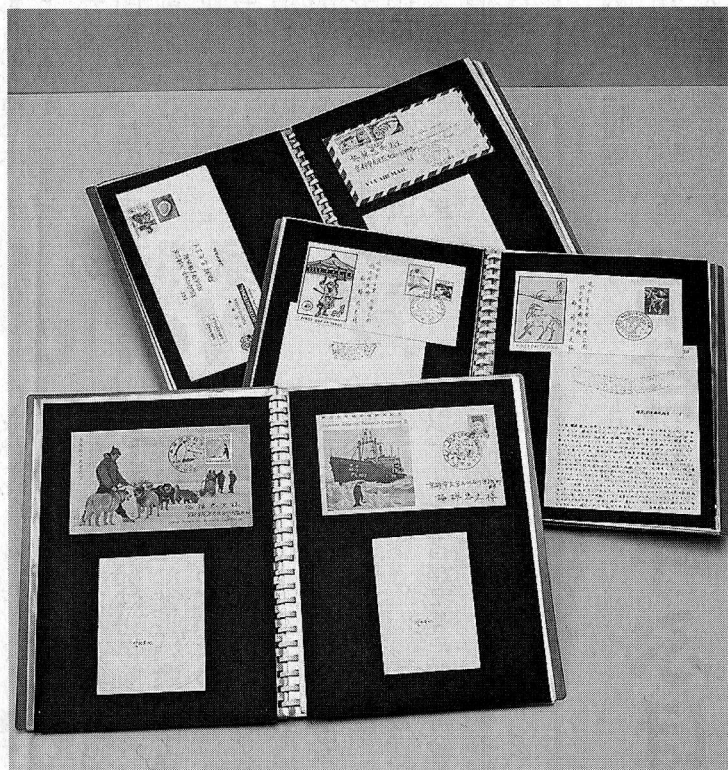
喉もと過ぎれば熱忘れ、とい
うのは人の世の常なのだろうか。私
たちは本当に何度も忘れてきた。1
995年の高速増殖炉もんじゅのナ
トリウム漏れ事故のことも、199
9年の東海村の臨界事故のことも
そもそも辛いことを覚えているの
が辛い。しかし、今回ばかりは忘れ
ることは許されないだろう。なぜな
ら、決して過去で終わることではな
く、まだまだ未来に続くことだけ
ら。

関心を失わずに持続させるにはど
うすればいいだろうか。

世界がわたしをよんでいる

梅棹忠夫の『裏がえしの自伝』
は、関心の持続力をつちかうための
お手本になりそうだ。大工仕事や映
画製作など彼自身がアマチュア精神
で続けてきた領域に関する、実践の
記録である。正統な自伝に先行して
書かれたものが、このほど文庫本と
なって入手しやすくなった。

例えば、南極探検に対する梅棹の
関心を時系列で復元してみよう。1
940年、彼はイヌぞりについてよ
く勉強していたので、高校生(旧
制)だったにもかかわらず、京都大
学探検地理学会のカラフト踏査に参



南極からの手紙。「世界がわたしをよんでいる」と題された
切手コレクションのなかでも大のお気に入りだったという。

関心持続は夢への転換

加を許された。その成果を「犬糧いぬかの
研究」という論文にまとめた。本人
曰く、未熟な作品だったけれど、そ
れは日本唯一のイヌぞり実験記録と
なった。

1955年、アフガニスタンのモ
ゴール族の村で調査しているとき、
日本がいよいよ南極観測をするとい
うニュースをラジオで聞いて興奮し
た。翌56年、乞われて稚内に赴き、
イヌの訓練について助言した。さら
に翌57年、いよいよ昭和基地が開設
されると、その越冬隊の記録を、西
堀栄三郎隊長の膨大な日記を駆使し
て代筆した。南極から届いた手紙
は、「世界がわたしをよんでいる」
と名づけて切手のコレクションとし
た。

このように、梅棹は20歳の頃の夢
を別の形へと変えながら維持しつづ
けた。関心を持続させることができ
た理由は、やはり好きなことだった
からであろう。

いま、私たちが直面している文明
の苦悩も、あらかじめ素敵すてきなことに
転換しておかないと、関心を持続す
ることが難しいに違いない。

電気ばかりでなく食料も、おおよそ
エネルギーに換算されるものは、今
よりも少なめに利用して、心や身体
を無理なくシエイプアップする。仕
事も他人とシェアすることにによっ
て、労働と余暇の割合を調整する。
過労の人を減らし、無職の人も減ら
せるように。そんなふうに、自分た
ちにとって何が素敵であるかを想像
してみよう。